

身体表現あそびの保育内容の検討Ⅳ

—保育士による「草むらごっこ」の実践から—

本山 益子、平野 仁美

同朋大学

平野考案の「草むらごっこ」という身体表現あそびを保育士が実践する保育をDVDに収録・分析する機会を得た。その結果、子どもたちが「草むらごっこ」での「動く楽しさ」と「表現の楽しさ」を体感する姿が確認できた。従前に平野による「草むらごっこ」実践を観る経験の有無が、保育士の保育方法に影響していることも確認できたが、その方法の違いに関係なく、子どもたちの背景にある「草むらごっこ」の楽しさの定着が、今回の保育実践を支えていることが明らかになった。

キーワード：身体表現あそび、保育士、保育内容、保育実践、草むらごっこ

1. はじめに

筆者らは、多くの保育者が気軽に身体表現あそびを実践することを願い、「草むら」¹⁾という具体的な手がかりを用いた実践研究²⁾³⁾⁴⁾を継続している。まず、「草むらごっこ」の保育実践を年齢別に分析することからはじめた。「草むらごっこ」のあそび経験のある子どもたちは、年齢に関係なく、存在している「草むら」を目にすることによって、身体表現あそびの楽しさを想起し、その展開に応じてライブで活用する姿を確認することができた。次に、あそび経験のない2歳児を対象に、継続した2回の実践を検証した結果、2歳児にも「草むらごっこ」の楽しさは定着することがわかった。つまり、最初の段階で、「草むら」からの出入りに代表される「動く楽しさ」を十分に体感するツールとして「草むら」と出会うことが、身体表現あそびの楽しさを導く鍵を握るとの見地を得ることになった。そして、身体表現あそびを初めて経験する5歳児の実践と先行研究⁵⁾の比較からも、「草むら」が「動く楽しさ」を体感できるツールとして有

効であることは確認できた。その背景には、「見る・動く・表現する」という異なる保育場面において、子どもたちが「草むら」を効果的に活用する保育内容が保証されていた。さらに、身体表現あそびの実践における導入の重要性も確認することにつながった。①「やりたい」という意欲を引き出す側面。②心と身体の開放を行う動きの側面。③身体を意識させ、イメージを誘発する表現の側面という3種類の内容を含む丁寧な導入が「表現の楽しさ」を導くポイントであることが示唆されたのである。

以上のように、いろいろな観点から「草むらごっこ」の実践に関する検討を重ねてきたが、そのすべてが平野による実践に限定されていることは否めない。そこで今回、保育現場の保育士による「草むらごっこ」を分析する機会を得た。保育現場に「草むらごっこ」の実践が普及するための一基礎資料を得るために、具体的には、保育士による「草むら」の活用方法・位置づけについて、さらに、その保育内容について検討することを本研究の目的とした。

2. 研究方法

(1) 期間：2013 年 10 月

(2) 対象：綾部市綾東幼稚園園児と担任保育士

- ① 2 歳児クラス（園児 10 名・保育歴 3 年目）
- ② 3 歳児クラス（園児 16 名・保育歴 20 年目）
- ③ 4 歳児クラス（園児 20 名・保育歴 1 年目）
- ④ 5 歳児クラス（園児 25 名・保育歴 12 年目）

(3) 保育「草むらごっこ」

今回は保育内容に関しては、各保育士に一任した。

(4) 方法：DVD と幼稚園作成の「指導部分案」の記録から、「保育の実際」を「ねらい・内容・保育時間・あそびの展開・草むらの活用」の観点で分析した。さらに、記録の項目である「心に残った場面」「DVD を観て」「考察」による

「保育士の振り返り」と共に年齢別の表を作成し、保育内容などの検討に用いた。

3. 結果と考察

(1) 保育の実際と保育士の振り返り

① 2 歳児クラスの保育（表 1 参照）

まず、2 歳児の 10 月に実施したが、「何度かあそんでいる『草むらごっこ』」であり「何度も繰り返し楽しんでいる内容」だったので、「ほとんどの子どもが楽しみにしていた」。DVD から「子どもたちが笑顔で走ったり跳んだり」する姿や「保育士の手拍子や声に上手に反応」する様子が確認されている。保育士はそのような子どもの姿を喜ぶとともに、「今後は新しい内容も取り入れたい」と、次回への意欲を記している。

表 1. 2 歳児クラスの「草むらごっこ」

保育の 実際	対象：2 歳児クラス 10 名		指導者：I（保育歴 3 年目）	保育時間：10 分 15 秒
	ねらい：・身体を動かしてあそぶことを楽しむ			
	内 容：・草むらの出入りを楽しみながらあそぶ ・保育者や友だちと身体をつかったのしくあそぶ			
	あそびの展開			草むらの活用
	・ 声や音を聞いて動く 「パチン（手拍子）」⇒立つ 「ドスン」⇒座る 「ゴロン」⇒寝る 「ピョン」⇒跳ぶ タンバリンの連打⇒走る～「ピタ」⇒止まってポーズ ・ 草のまわりを散歩してあそぶ ウサギになって散歩する～「オオカミが来た」⇒「草むら」に隠れる			設置○ 草の内側で動く 草の外周を走る～止まる 草に隠れる～出てくる 草の外周を走る～草に隠れる
振り返り	心に残った場面		DVD を観て	考察
	・ 何度も遊んでいる「草むらごっこ」だったので、ほとんどの子どもが楽しみにしていた。 ・ いつも「止まる」ことのできない子どもが、タンバリンを見て・聞いて止まっていたのが驚きと嬉しさでいっぱいだった。		・ 思っていた（やっていた時）より、子どもたちが笑顔で走ったり跳んだりしていてよかった。 ・ 保育者の手拍子や声に、とても上手に（素早く）反応し、立ったり座ったりできていた。→話が聞けていた。	・ 何度も繰り返し楽しんでいた内容だったので、今後は、新しい内容も取り入れたい。

具体的に保育内容を見てみると、まず、「保育者の声や音を聞いて動く」場面では、「草むら」の内側で、保育士が手拍子や「ドスン・ゴロン・ピョン」という声を発して動くのと一緒に、子どもたちも「座る・寝る・跳ぶ」などの動きを楽しんでいる。そして、タンバリンを連打すると、「草むら」の外周を走り、「ピタ」の声で止まることができていた。さらに、「草のまわりを散歩してあそぶ」場面では、保育士も子どももウサギになって散歩し、保育士の「オオカミが来た」の声を合図に、口々に「キャー」と言っ

て「草むら」の後ろに隠れていた。

保育歴3年目の保育士が、前年度に観た平野の実践⁶⁾をモデルに、今年度も子どもたちとの経験の共有を蓄積していた。その実績を背景に今回も、「身体を動かしてあそぶことを楽しむ」との「ねらい」通り、約10分間、自然に「草むら」を活用し、「動く楽しさ」を味わう子どもたちの姿を確認することができた。

② 3歳児クラスの保育（表2参照）

保育歴 20 年目の保育士による実践であるが、
「草むらごっこ」の実践は初めてということもあ

表2. 3歳児クラスの「草むらごっこ」

保育の実 際	対象：3 歳児クラス 16 名	指導者：A（保育歴 20 年目）	保育時間：12 分 31 秒
	ねらい：・ボールになって動くことを楽しむ		
	内 容：・音に合わせて、ボールの動きを真似たりしてあそぶ ・友だちと一緒にからだを動かす		
	あそびの展開		草むらの活用
振 り 返 り	・「草むら」の説明 ・ピアノの音を聞いて動く～「草むら」に隠れる 「さんぽ」の曲⇒歩く 「カエルの歌」⇒飛び跳ねる 低音の和音（長音）⇒大きくドシンと歩く 「トンボのめがね」⇒手を広げて走る ・保育士が扱うボールになる 「つく」⇒連続ジャンプ 「転がす」⇒転がる 「上に投げる～キャッチ」⇒上にジャンプ～静止 「副担任に投げる」⇒走って「草むら」に隠れる	設置○ 好きな場所で動く 草の外周を歩く ～草に隠れる 好きな場所で動く ～草に隠れる	
	心に残った場面	DVD を観て	考察
	・「草むらごっこ」のイメージの有無にかかわらず、素直に、シンプルに「隠れる～出る」を笑顔で楽しんでいたのが印象的であった。	・私自身のひとつひとつの動きの切り替えが早すぎた。とにかく、動いてもらうこと、全体に目を配る余裕がなかった。 ・せっかく、子どもたちが表現しているのに、もっとゆっくり楽しめばよかったと感じた。	・ボールが転がる動きの時、転がりながら「こう？　こうか？」とたずねる子どもが居た。感じたことを体で表現する楽しさの反面、私は誘導ではない声のかけ方に難しさを感じた。 ・ボールという素材には親しみを持ち、「変身」の声でボールになり楽しんでいたが、動きとしては単純だったかもしれない。

り、最初に「草むら」の説明を行っている。そして、保育士が得意な「ピアノの音を聞いて動く」内容から始め、子どもたちは「草むら」とらわれず好きな場所で、「さんぽ」の曲に合わせて歩き、「カエルの歌」では跳び、低音の和音で大きくドシンと歩き、「トンボのめがね」の曲で走っている。これらに関して、保育士から動きの指示は全くなく、子どもたちが音を聴いて自ら動いており、日頃からこのような活動を行っていることがわかる。ただ、ピアノの音が止まったら「草むら」に隠れることは初めてのことであり、保育士が「素直に、シンプルに『隠れる～出る』を笑顔で楽しんでいたので印象的であった」と記述しているように、「草むら」を活用して「動く楽しさ」を体感する子どもたちの姿が捉えられている。

次に、「保育士が扱うボールになる」場面でも、保育士がボールをついたり、転がしたり、上に投げてキャッチする様子を見ている子どもたちは好きな場所で、そのボールの様子を表現している。そして、副担任の保育士にボールを投げると、子どもたちは「草むら」に隠れていた。保育士の「ねらい」が「ボールになって動くことを楽しむ」であったため、「保育士の振り返り」にも、この場面に関する記述が多く、DVDを観ることで「せっかく、子どもたちが表現しているのに、もっとゆっくり楽しめばよかった」と振り返っている。また、「こうか？」とたずねてくる子どもへの対応から、「誘導ではない声のかけ方に難しさを感じ」「ボールになり楽しんでいたが、動きとしては単純だったかもしれない」と反省している。

前年度、平野と一緒に「草むらごっこ」を体験した子どもたちが対象であったため、どちらかというと身体表現あそびを自分の保育では実践してこなかった保育士も、自分の得意な内容

に「草むら」を取り入れることで、子どもたちに「草むら」を活用した「動く楽しさ」を体感させることができていた。また、「表現の楽しさ」に関しても、自分の保育経験に基づく広範な観点から保育を見つめ直していることがわかる。

③ 4歳児クラスの保育（表3参照）

他の保育士とは異なり、保育歴1年目の保育士は平野の実践を観る機会がなかった。その影響もあってか「草むら」を活用しない実践であった。しかし、保育士は「『草むらごっこ』をする」と、子どもたちに話すことから保育を始めており、子どもたちに戸惑いも見られなかった。つまり、子どもたちにとっては「草むらごっこ」が身体表現あそびの代名詞になっていると推察される。

展開された保育は「新聞紙になりきってあそぶ」という内容であり、保育士が手に持つ新聞紙の様子を子どもたちが自分なりの動きで表現していた。両手を広げ一枚の大きな新聞紙になった子どもたちは、折られるとその手を合わすことから始め、身体を曲げていった。新聞紙を広げていくと、今度は曲げた関節を伸ばしていく。そして、「風が吹いてきてビュー」の声で走り出し、「風が止まるビタ」の声で静止してポーズをとっている。さらに、クシャクシャに丸めると小さくなって身体を丸くし、それを転がすと転がる子どもや、立って回る子どもが見られた。また、破る表現では足幅を広げて足踏みをし、徐々に小さくなるなどの工夫が見られた。破られた新聞紙を投げて散らばせると、跳ぶや回る動きで表現しており、散らばった紙を一つに集めると友だちとくっついて楽しんでいた。

この保育士は、身体表現あそびの実践をするのは初めてであったが、保育後のDVD視聴を通して、子どもたちが「声かけにあわせてイメー

表 3. 4 歳児クラスの「草むらごっこ」

保育 の 実 際	対象：4 歳児クラス 20 名	指導者：I（保育歴 1 年目）	保育時間：11 分 40 秒
	ねらい：・友だちと体を動かし、自分なりに表現することを楽しむ ・いろいろな動きを楽しむ		
	内 容：・題材に合わせて楽しく表現する ・新聞紙になりきって表現する		
	あそびの展開		草むらの活用
	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞紙になりきってあそぶ 「一枚の大きな新聞紙になる」⇒両手を広げる 「半分に折る」⇒頭上で両手を合わす 「もう半分に折る」⇒上体を折る（曲げる） 「もう半分に折る」⇒膝を曲げる 「ひとつずつ広げる」⇒曲げた関節を伸ばす 「風が吹いてきて『ビュー』」⇒走る 「風が止まる『ピタ』」⇒静止（ポーズ） 「クシャクシャにする」⇒小さく丸くなっていく 「転がす」⇒転がる・立って回る 「破る」⇒足幅を広くし小さくなっていく 「投げて散らばらせる」⇒跳ぶ・回る 「ひとつに集める」⇒友だちとくっつく 「上に投げる」⇒ジャンプ 		設置×
振り 返 り	心に残った場面	DVD を観て	考察
	<ul style="list-style-type: none"> ・体を大きく伸ばしたり、小さくしたりして楽しむだけでなく、友だちと体を寄せ合ったり、手をつないだりして、一緒にする動きを楽しんでいた。 ・おもしろい表現やかわった表現を紹介すると、その友だちの動きを真似したり、その動きを手がかりに、新聞紙になりきった動きを工夫していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ユラユラ、ビュー、ピタなどという表現では、ゆっくり、素速く、急に止まるなど、声かけにあわせてイメージをふくらませて体を動かしていた。 ・動きにメリハリがあつてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞紙の動きをよく見て、思い思いの表現で体を動かして、楽しめていた。 ・個人個人の動きだけでなく、みんなで一緒になって動くことを楽しんでいたように思えた。これから友だちと一緒に動くことができる表現あそびに発展できるテーマを考え取り組んでいきたいと思う。

ジをふくらませて」動いていた姿や「動きにメリハリがあった」ことを喜んで評価していた。また、心に残った場面としては、「友だちと体を寄せ合ったり、手をつないだりして、一緒にする動きを楽しむ」様子と、紹介した「友だちの動きを真似したり、その動きを手がかりに、新聞紙になりきった動きを工夫していた」様子をあげている。さらに、「これから友だちと一緒に動くことができる表現あそびに発展できるテーマ

を考え取り組んでいきたい」と、今後につながる記述をしている。つまり、今回の「ねらい」にも「友だちと体を動かし、自分なりに表現することを楽しむ」と記述していたように、「友だち」との関わりに心を配る保育士の姿が「振り返り」の記述から読み取れた。

今回の保育においてはライブで新聞紙を用い、子どもたちのイメージを視覚から刺激することを行っている。経験の浅い保育士自身も新

間紙を動かすことに集中できたので、比較的実践しやすかったと推察できる。そして、保育士の「ねらい」通り、戸惑うことなく「いろいろ

な動きを楽しむ」姿が確認できたが、対象とした子どもたちの身体表現あそび経験の蓄積が効を奏していると考える。

④ 5歳児クラスの保育（表4参照）

表4. 5歳児クラスの「草むらごっこ」

保育 の 実 際	対象：5歳児クラス25名	指導者：W（保育歴13年目）	保育時間：34分59秒
	ねらい：・忍者になりきって動くことを楽しむ ・イメージをふくらませて表現することを楽しむ		
	内 容：・忍者修行に期待感をもって喜んで動く ・話をよく聞いて内容を理解し、楽しく表現あそびをする ・新聞紙を使うことでイメージを膨らませて楽しむ		
	あそびの展開		草むらの活用
振 り 返 り	<ul style="list-style-type: none"> ・忍者になって動く 「足音を立てずに歩く～敵が来て隠れる」 「素早く走る～隠れる」 「歩く～石になって止まる」 「静かに走る～木や草になって止まる」 ・新聞紙を使ってあそぶ 「空を飛ぶ術」 「隠れる術」 「望遠鏡の術」⇒（新聞紙で望遠鏡を作る） ・攻撃から逃げる（命を守る練習） 「手裏剣から逃げる」 「爆弾から逃げる」 		<p>設置○ 草は意識せずホールを廻って歩く 草の内側を走る～草に隠れる 草の後ろで待機 →草を壁際に移動 ＝設置×</p> <p>自ら壁際の草を活用し隠れる子どもも出現</p>
	心に残った場面	DVDを観て	考察
	<p>・走る、歩くなどの導入部分は保育者のイメージを膨らませる言葉かけでなりきって徐々に盛り上がり上がっていくことができた。単純に「止まる」より、石や木などに変身することが子どもの心を捉えたようで楽しそうになりきって表現していた。</p> <p>・新聞紙というアイテムを使用したことにより、子ども達になりきりの気持ちがアップしたようで、本当に見えないよう（なつもり）に隠れていたし、その表現を楽しんでいた。</p>	<p>・空を飛ぶ表現で、高く昇ったあとに上昇気流にのるイメージでフワ～と跳んで欲しいと思っていったのだが、なかなかイメージが伝わらずに走る表現を続けていたので、この場面を切り上げた。しかし、DVDを観て、「高くたか～く」という声かけに腕を伸ばし背を高くしながら走っている姿が見られ、保育者自身のイメージの表現ばかりを期待し、子どもの表現を見落としていたことに反省した。</p> <p>・新聞紙を使うことで表現が盛り上がることと、新聞紙があることで表現以外のことに気をとられてしまうことに、使い方の難しさを感じた。単に表現活動に飽きてしまったというより、新聞紙を使った別の楽しみに流れている所があった。</p>	<p>・子どもたちの大好きな忍者修行だったので声かけひとつでどんどん集中して表現に入っていた。イメージしやすいものには思いっきり表現に集中できるが、いわゆる経験のない想像の世界ではイメージすることの難しさを感じた。子ども達の経験不足も助長しているが、視覚などの確実な認識がないと曖昧なうけとりしかできない、また周りに流されてしまい工夫に必要な声かけが届かないという、このクラスの特質が観てとれている。5歳児のこの時期にできるイメージの発展もまだ難しい段階のようなので、一つひとつのイメージを掘り下げながら表現を楽しむことを繰り返し、表現を発展させていく楽しさにつなげたいと思う。</p>

他のクラスの実践が10分台の保育時間であったのに対し、このクラスの実践は35分と長く、この間、保育士の「ねらい」通り、子どもたちは「忍者になりきって動くことを楽し」んでいた。具体的な内容としては、足音を立てずに歩く。隠れる。石や草木になって止まる様子を、忍者になって自分なりに表現していた。さらに、新聞紙を使った「空を飛ぶ術」「隠れる術」「望遠鏡の術」では、広げた新聞紙をもった両手を高く上げ走ったり、新聞紙の下に隠れる、さらに、新聞紙で筒を作って覗いたりしていた。

「草むら」に関しては、前年度平野の実践を観るだけでなく、自らも実践に挑戦してきた実績⁷⁾を活かし、今回も表現的な内容のなかに「草むら」の活用を盛り込んでいた。その保育において、子どもたちは新聞紙を使う前まで設置されていた「草むら」を、自分なりに活用し隠れていた。さらに、最後の手裏剣や爆弾などの「攻撃から逃げる」場面では、壁際に撤去されていた「草むら」を、自らの考えで「攻撃から逃げる」ツールとして活用する子どもの姿も確認できた。

保育士は、振り返りにおいて「単純に『止まる』より、石や木などに変身することが子どもの心を捉えた」や、「子どもたちの大好きな忍者

修行だったので声かけひとつでどんどん集中して表現に入っていた」と評価している。一方、新聞紙を活用したことについては「子どもたちのなりきりの気持ちがアップした」と効果を認めつつ、「表現以外のことに気をとられ、新聞紙を使った別の楽しみに流れている所があった」と振り返り、新聞紙の使い方に難しさを感じていることがわかる。

さらに、「空を飛ぶ術」の場面では、保育士の「上昇気流にのるイメージでフワーと跳んで欲しい」という願いが伝わらなかったと捉えてい

たが、DVDの視聴により「腕を伸ばし背を高くしながら走っている」子どもなりの表現を見落としていたことを反省している。そして、このクラスの特徴を「いわゆる経験のない想像の世界ではイメージすることの難しさを感じ」るや、「視覚などの確実な認識がないと曖昧なうけとりしかできない、また周りに流されてしまい工夫に必要な声かけが届かない」あるいは、「5歳児のこの時期にできるイメージの発展もまだ難しい段階」と捉えた上で、「一つひとつのイメージを掘り下げながら表現を楽しむことを繰り返す」今後の保育を構想していることが確認できた。

(2) 保育のねらい

各保育士が立てた「ねらい」は、「身体を動かしてあそぶことを楽しむ(2歳児)」「ボールになって動くことを楽しむ(3歳児)」「友だちと身体を動かし、自分なりに表現することを楽しむ・いろいろな動きを楽しむ(4歳児)」「忍者になりきって動くことを楽しむ・イメージを膨らませて表現することを楽しむ(5歳児)」であった。これらから、どの年齢のクラスも「〇〇を楽しむ」という心情に関するねらいをあげていることがわかる。さらに、何を楽しむのかについては、その対象が、「あそぶこと(2歳児)→動くこと(3歳児・4歳児・5歳児)→表現すること(4歳児・5歳児)」と、加齢にともなって内容が限定されていることがわかる。さらに、その「動くこと」に関しても「なって動く(3歳児)」「いろいろな動きを(4歳児)」「なりきって動く(5歳児)」と異なり、求める動きの質が深化していると捉えることができる。

(3) 保育内容と子どもの楽しさ体験

2歳児クラスは、「保育士の声や音を聞いて動

く」という「何度も繰り返し楽しんでいる内容」だったので、子どもたちも保育士と「動く楽しさ」を共有できていた。5歳児クラスも、「子どもたちの大好きな忍者修行」のなかで、子どもたちに忍者になりきる「表現の楽しさ」と、「草むら」を活用した「動く楽しさ」を保証する内容であった。つまり、2歳児クラスと5歳児クラスは、今年度繰り返し「草むらごっこ」を実践していることが示されており、2歳児クラスの保育士の「いつも『止まる』ことのできない子ども」が今日は止まっていたのを喜ぶ記述が見られるなど、「草むらごっこ」が日常の保育に浸透していることが窺える。このことは、「新しい内容を取り入れたい（2歳児）」「表現を楽しむことを繰り返し、表現を発展させていく楽しさにつなげたい（5歳児）」など、今後の身体表現あそびを展望する記述からも読み取れる。

一方、3歳児クラスと4歳児クラスの保育士は、「草むらごっこ」は初めての取り組みであった。この両者の保育に共通する内容は、視覚的にイメージを捉えることが可能な「ボール（3歳児）」「新聞紙（4歳児）」を用い、それを表現のテーマにしている点である。保育士が展開のなかでモノを扱い、子どもたちはそのモノの様子を見て表現する内容になっていた。保育士はモノを扱うことに集中でき、子どもたちもモノから得る視覚的情報によって動きやすいという、両者にとっての利点がこれらの内容にはある。実際、これらの保育において、子どもたちが「動く楽しさ」と「表現の楽しさ」を味わっていたことは、DVDと「保育士の振り返り」の両方から確認することができた。

(4)「草むら」の活用

まず、「草むら」が設置された2歳児・3歳児・5歳児の実践を見てみると、子どもたちは全く戸

惑うことなく、むしろ何ら意識することもなく、自分の意志で「草むら」の内側や周囲を動くことから始めていた。そして、保育士による「オオカミが来る（2歳児）」「ピアノの音が止まる・ボールが副担任にパスされる（3歳児）」「忍者の敵が来る（5歳児）」合図で、「草むら」に隠れることを繰り返し楽しんでいた。さらに、5歳児クラスでは壁際に撤去された「草むら」を、自分の意志で「攻撃から逃げる」際のツールとして活用する子どもの姿も見られた。

次に、4歳児クラスの実践においては、保育士が「『草むらごっこ』をする」と子どもに伝えると、子どもたちは「草むら」が設置されていないことに疑問を感じることもなく、自然に身体表現あそびを始めていた。このクラスの保育士は「草むら」は活用せず、「草むらごっこ」という言葉のみ活用したことになる。このことは、平野の実践を観る機会のなかった保育歴1年目の保育士にとっては、「草むら」の活用自体が難しいことを示唆しているのかもしれない。しかし、このクラスの子どもには前年度の「草むらごっこ」の楽しい経験が豊富にあったので、「草むら」が活用されなくとも「草むらごっこ」という言葉に反応して活動を開始できたのだろう。

つまり、この幼児園の子どもたちには、前年度までに体験した平野による「草むらごっこ」の楽しさが根付いていると考えられ、「草むら」の姿や「草むらごっこ」という言葉がその楽しさを彷彿させ、今回の楽しさをも支えることにつながったと捉えることができる。先行研究⁸⁾の子どもたちは、平野持参の「草むら」に対し、期待がふくらみテンションが高くなる様子が見られたが、この幼児園では、常に自前の「草むら」がホールに存在していることもあり、「草むら」の存在や「草むらごっこ」というフレーズが特別のモノやコトではないと感ずることができ

る。「草むら」は身体表現あそびそのものの、あるいは、身体表現あそびの“場”の象徴として、子どもたちは認識していると捉えられる。つまり、この幼児園の子どもたちには「草むらごっこ」としての「動く楽しさ」は浸透しており、「表現の楽しさ」を探究する素地も備わってきていることがわかる。その背景にある平野が重ねてきた「草むらごっこ」実践の蓄積は、子どもたちだけでなく、平野の実践を観て学んできた保育士にも反映し、幼児園全体に身近な保育ツールとして「草むら」が位置付いていると捉えることができる。それは、今回、自分なりに「草むら」を活用し、子どもたちに「草むら」からの出入りによる「動く楽しさ」や「表現の楽しさ」を提供する保育内容を実践していた3名（2歳児・3歳児・5歳児）の保育実践から明らかである。

4. まとめ

保育現場の保育者が、気軽に身体表現あそびを実践することを願って継続してきた、「草むら」を活用した実践研究の一環として、今回、初めて保育現場の現役保育士の実践を分析する機会を得た。

その結果、保育内容や「草むら」の活用などの観点から、4人の保育士の実践を表5にまとめることができた。

この表5より、どのクラスも子どもたちの発達や興味を考慮した表現内容を取り入れて保育が組み立てられ、「ねらい」も立てられていた。そして、その「ねらい」については、5歳児の保育士は課題も記述していたが、全クラスの保育士が概ね達成できたと捉えていることがわかる。

しかし、当日の実践までの経験は、クラスにより異なっていた。まず、2歳児クラスには、保育士が平野の実践経験を生かし、今年度のクラ

スでも実践を繰り返してきた実績がある。また、今年度の実践は初めての3歳児クラスは、子どもには平野と共にあそんだ体験があり、保育士にも平野の実践を観た前年度の経験がある。一方、4歳児クラスは、保育士には全く経験がなかったが、子どもたちには平野との楽しい体験があった。最後に、5歳児クラスは、豊富な両者の経験に基づき、35分という長時間の実践が実現している。

さらに、これらの経験により、当日の保育方法にも違いが見られた。平野の実践を観た経験がある保育士は「草むら」を活用しているが、観たことのない4歳児クラスの保育士は「草むら」は活用せず、結果的に「草むらごっこ」という言葉が子どもたちの楽しさの想起につながっていた。しかし、どちらにしても「草むらごっこ」を身体表現あそびそのものとして認識し、その楽しさが浸透しているこの幼児園においては、「草むら」の存在や「草むらごっこ」の言葉が、子どもたちの意欲の導入になっていると捉えることができる。その結果、子どもの心に「動く楽しさ」や「表現の楽しさ」が自ら出現するので、保育士の経験はあまり問題とはなっていないことが読み取れる。一方、保育士が「草むら」自体を活用するためには、前提条件として、実際にそのあそびを観る経験が必要である⁹⁾ことも推察できた。

また、日常保育において「草むらごっこ」を実践していない3歳児クラスと4歳児クラスの保育士は「草むら」以外のモノを活用し、子どもたちの視覚からイメージを想起させることを行っていた。このように、身体表現あそびの実践経験が少ない保育士にとっては、モノを活用し子どもたちのイメージを誘発する方法が有効^{10) 11) 12)}であることが、今回の結果からも確認できたと考える。

表5. 各クラスの保育の実際と背景

	2歳児クラス		3歳児クラス		4歳児クラス		5歳児クラス	
	子ども	保育士	子ども	保育士	子ども	保育士	子ども	保育士
前年度の平野の実践経験	×	○	○	○	○	×	○	○
今年度の実践経験	○		×		×		○	
草むらの活用 (草むらからの出入り)	○		○		× 「草むらごっこ」 という言葉を活用		○→×→△ 途中で撤去するも 子どもが活用	
草むら以外のモノの活用	×		×	ボール	×	新聞紙	新聞紙	
表現内容(○○になる)	ウサギ		ボール		新聞紙		忍者	
ねらい(○○を楽しむ)	あそぶこと		なって動くこと		・いろいろな動き ・自分なりに表現 する		・なりきって動く ・イメージをふく らませて表現する	
ねらいの達成	○		○		○		○ 経験のない想像の 世界でのイメージ が困難	

今回、保育士の実践を検討したわけであるが、従前に「草むらごっこ＝身体表現あそび」の楽しさを認識している子どもたちを対象としたという条件を看過することはできない。しかし、換言すれば、今回の結果は、子どもたちに身体表現あそびの楽しさが根付けば、保育士の経験は関係なく、身体表現あそびは気軽に実践できることを示唆していると捉えることができる。ただ、その際「草むら」というツールが有効に作用していたことも事実であろう。つまり、今回の幼稚園のように、最初、経験者による「草むらごっこ」の実践を通して、体験した子どもたちに楽しさを定着させるとともに、保育士が観た実践を真似、あるいは自分なりに取り込み、自分の「草むらごっこ」としての実践につなげる方法は、「草むらごっこ」を普及させる方法として有効であると言えよう。そして、その蓄積が身体表現あそびの気軽な実践につながる事が期待できるのである。

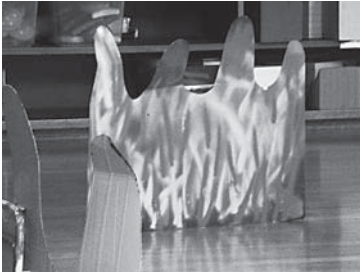
一方、そのような経験者の力に頼れない場合、

2歳児クラスからの地道な実践の蓄積が求められるだろう。全く「草むらごっこ」の経験がない子どもを対象とする場合、子どもたちが最初に「草むら」とどのような出会いをすることが、後々の楽しさ定着につながるのかについて、つまり、「動く楽しさ」を十分に体感できるツールとしての「草むら」の具体的な活用方法や出会いについて研究を継続したいと考える。

なお、本稿は日本保育学会第67回大会（大阪総合保育大学・2014年）でのポスター発表¹³⁾をまとめたものである。発表の際、幼稚園において個人情報などの許可は得ている。

注

- 1) ダンボールなどによって作成された下図のような草を数個用いて作られた空間。さらに、その空間で行う身体表現あそびを「草むらごっこ」と呼ぶ。



- 2) 本山益子 平野仁美 身体表現あそびの保育内容の検討－3～5歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から－ 京都文教短期大学研究紀要第50集 pp.147-157 2012
- 3) 本山益子 平野仁美 身体表現あそびの保育内容の検討Ⅱ－2歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から－ 京都文教短期大学研究紀要第51集 pp.75-85 2013
- 4) 本山益子 平野仁美 身体表現あそびの保育内容の検討Ⅲ－経験を有しない5歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から－ 京都文教短期大学研究紀要第52集 pp.57-67 2014
- 5) 本山益子 平野仁美 身体表現あそびの保育内容の検討－3～5歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から－ 京都文教短期大学研究紀要第50集

- pp.147-157 2012
- 6) 渡邊友子 平野仁美ほか 子どもと保育者が共に育つ身体表現－「草むらごっこ」を通して－日本保育学会第66回大会論文集 p.259 2013
- 7) 渡邊友子 平野仁美ほか 身体表現の実践研究－「草むらごっこ」の保育内容検討から－日本保育学会第67回大会論文集 p.69 2014
- 8) 本山益子 平野仁美 身体表現あそびの保育内容の検討－3～5歳児クラスでの「草むらごっこ」の実践から－ 京都文教短期大学研究紀要第50集 pp.147-157 2012
- 9) 本山益子 身体表現を見ることによる学び 岡崎女子短期大学研究紀要第40号 pp.35-43 2007
- 10) 全国身体障害者総合福祉センター編 からだや動きで表現するために－障害児・者のアクティビティ向上に向けて－ 中央法規出版株式会社 pp.72-78 1997
- 11) 西 洋子 からだ×ミュージアム×ひょうげん デザインブック 国立民族学博物館 2012
- 12) 猪崎弥生 山田悠莉 乳幼児期のダンス ABC 一二三書房 pp.147-158 2013
- 13) 本山益子 平野仁美 身体表現あそびの保育内容の検討Ⅳ－保育士による「草むらごっこ」の実践から－ 日本保育学会第67回大会論文集 p.559 2014

